

歌に触れる

遊縁の衆(人生を数倍楽しむ会)

平成二十四年四月二十一日(第十二回)

(佐藤 亮照)

仏門に入りて疾きことはや十年ありがたき教えありがたき日々
相次いで逝きし親しき方々を送り迎える無常なる春

ふと見れば横たわる猫道端に敵しき冬を越したといつのに

(佐藤 志亮)

春の風絆の糸に徳を織り誰かに届けと思いをはこぶ

(松田 昌泰)

わがサンシユ黄色あざやか誇らしげ遅れた春を一揆挽回

「近所とごみ出し」いで立ち話いつの間にならカラスも一緒

(黒沼 貞志)

春分けし残雪こえて暮掃除想い往き交つ彼岸と此岸しがた

亡き義母の残せし日記読む妻のふるさと離れし年月長しながし

亡き義母の形見の日記はらり落つ彼岸の兄の記事の切抜き

首こりと言われて気付く己が年齢彼岸の兄をすでに越えたりおと

名残雪「これがそつね」とくり返すことしの春は近くて遠い

雪多き今年の冬を耐え抜いてわが庭先に小さき花々

春よこい堅雪くすしで穴あきし手袋語る冬の活躍

春来たりどこに移そか目覚ましよ明るき障子と鳥のさえずり

雪が舞う春の嵐にひっそりと主なき家街並みの中

薄ら日ほこの地と等しくほほ笑むかかの地はいまだがれきにゆえへ

高齢の仲間に入りし証し手についに来たねと視線が泳ぐ

地方紙の紙面に載りし我が活動届きし便りひとり癒され

地鎮祭願い通じて雪も止み知己の棲家に祝詞流れるすみが

山あいに蕎麦を求めて春つらら古民家受継ぐ百年の味